

故郷第四場面 読んだ読んだ

今、母の口から彼の名が出たので、この子どものころの思い出が、電光のように一挙によみがえり、わたしはやつと美しい故郷を見た思いがした。そのあと、近所にいる親戚が何人も訪ねてきた。その応対に追われながら、暇をみて荷ごしらえをした。そんなことで四、五日つぶれた。



主人公は、ルントウの話を知ると、美しい故郷の思いがした。しかし、母は、ルントウの家の事情を知っていて、言いたくなかったため、道具を取る連中を注意しに行ってしまった。すると、五十がらみの女が主人公に話しかけてきた。この人は豆腐屋のヤンおばさんだった。昔は白粉を塗って、優しい人だったため、男性からも女性からも人気だった。しかし、今ではほお骨が出たり、薄い唇で、見た目が変わっていた。ヤンおばさんも、貧しかった。そこで、主人公が売ろうとしていた道具をくれと言い始めたのだ。ヤンおばさんは、主人公の家が昔のようにお金があると思っていたのだ。一度は否定しようとしたが、信じてもらえそうになかったため、口を閉じた。

くん

主人公は、ルントウの話を出されて、明るくなった。そんな主人公を見た母は、ルントウの生活について聞かれたとき、「あの連中」のところにいき、苦しい現実を伝える暗さから逃げた。そんな中、主人公の前

三年一組 氏名

に、昔は知らない人はいないほど美人だったのに「コンパス」に変わってしまったヤンおばさんが現れた。そんなヤンおばさんは、主人公に、ありもしないでたらめな情報を言うことで皮肉っていた。そんなヤンおばさんを主人公は嫌っていた。

くん

主人公の母は、主人公に明るくなくてもらおうと、とつさにルントウの名を出したが、ルントウの現状を話すとまた暗くなるため、戸外の連中を見に行く行行って、その場から逃げた。

そのとき、五十がらみの女が現れたが、主人公はヤンおばさんだと分からなかった。ヤンおばさんは、昔は「豆腐屋小町」と呼ばれるほどの美人で、今のようにほお骨は出ていないし、コンパスのような姿勢ではなかったからである。また、性格が悪くなっており、主人公に対して皮肉を言ったりした。そんなヤンおばさんを主人公がよく思うわけなく、呼称を「コンパス」にしている。主人公は変わり果てたヤンおばさんを見た後、ルントウはどうなっているか心配になっただろう。

さん

主人公は、ルントウの名を聞いて美しい故郷を思い出した気がした。そして、ルントウに会いたくなり、「今、どんな？」と聞くと、母は、「あの連中」を理由に逃げてしまった。この話を聞くと暗くなってしまふと思つたからだ。昔とは全く違うヤンおばさんの呼称は「五十がらみの女」から「コンパス」に変わり、ヤンおばさんをよく思っていないと分かる。ヤンおばさんと再会した主人公は、ルントウがヤンおばさんのようになっていないか……、と心配した。

さん